JAMS 国際シンポジウム

東方政策の30年と今後の展望

日　時：2012年12月16日（土）　**場　所**：立教大学
主　催：日本マレーシア学会

開会挨拶

宮崎 恒二
日本マレーシア学会会長／東京外国語大学

皆様、本日はお忙しい中、ご来場くださりありがとうございます。日本マレーシア学会（JAMS）では、昨日より第21回研究大会を開催しておりますが、本日は特別企画として、本国際シンポジウム「東方政策の30年」を開催いたします。1982年にマハティル・モハマッド元首相により提唱されたルック・イースト・ポリシーの30周年を記念し、その意義と今後の課題を探るという意図で本シンポジウムを企画いたしました。

開催に当たりましては、関係各機関・組織のご協力を得ました。地域研究コンソーシアム（JCAS）社会連携プロジェクト「地域研究と外交実践の連携プロジェクト」（代表：川端隆史）、京都大学東南アジア研究所公募共同研究「教育・研究交流を通じた東アジアにおける産官学ネットワークの社会的影響の評価：東方政策の30年を振り返って」（代表：金子芳樹）の２つの研究プロジェクトのご協力を得たほか、特に外務省の全面的なご協力を得て、本日は、南東アジア第二課の山本敏生課長に基調講演をお願いしております。また、東方政策元留学生同窓会（ALEPS）アクマル・アブ・ハッサンさんには、元東方政策留学生としてご参加頂き、コメントをお願いしております。心から御礼申し上げます。

今日は、基調講演、パネリストの報告、ディスカッションと、東方政策の30年と今後の展望について、ともに考え、マレーシアに関する理解を深めていく機会となるよう願っております。

趣旨説明

川端 隆史
東京外国語大学

今日のシンポジウムを企画するに至った経緯をお話ししたいと思います。ルックイースト政策30周年ということで、今年さまざまな行事が行われています。JAMSとしても、外務省からご理解やご協力をいただきながら、政策に近いところで研究を進めてきました。外務省が私の古巣だという以上に、JAMSが積み重ねてきた活動実績に対する信頼があってこそ、外務省という重要な官庁の支援と理解が得られてここまで来たのだと思います。

今年４月と５月には、アジアの青年を日本にお招きするジェネシスというプログラムでマレーシアの人たちが来日したわけですが、JAMSから吉村真子会員や私が来日を仕上げる総括的な意見交換会に講師・司会役として出席する依頼を外務省から頂きました。そして６月、外務省にはJAMSの若手研究者をマレーシアに派遣していただき、私を含む若手研究者数名が、マレーシアで開催されたルックイースト政策のシンポジウムで発表したり、ルックイースト政策と関連の深い組織に訪問したりするなどの活動をしてきました。

このように、JAMSは学術団体としてさまざまな専門の見地からルックイースト政策について取り組んでおり、今日の午後のセッションはその成果を報告する場の一つとなります。また、JAMSの活動で非常にユニークな点として、私のように実務をベースとしながらも研究に携わる者にも重要な役割をさせてくれるという懐の深さがあり、社会連携を積極的に進めようとしています。

アカデミックの分野では、ルックイースト政策に関する研究の蓄積が各種の報告書として出されてい

ます。日本・マレーシア両国の政策および第三者による政策レビュー類といったものです。ただし、ルックイースト政策に関する学術論文は、日本でもマレーシアでも、日本語、英語、マレーシア語のいずれでもそれほど多くありません。その一方で、ルックイースト政策は日本とマレーシアの二国間の主柱になる政策だと言われ続けてきました。そのギャップをどう考えればよいのかという課題があります。現在進行中の政策をアカデミズムとしてどのように見ていくのかは重要な課題です。特に地域研究ではそのことが重要になります。JAMSはオープンな地域研究、社会に根ざしていく地域研究を目指しているところがあります。

さて、ルックイーストも実施から30年が経ちました。この間、日本・マレーシア両国は劇的な変化を迎えています。1982年に始まった政策ですが、この政策の開始時点のマレーシアの1人当たりGDPは1887米ドルしかありませんでした。今、ラオスが1,300米ドルぐらいでフィリピンが2,200米ドルぐらいですから、その間ぐらいだったということになります。それに対して2011年のデータでは9,700米ドルです。1万ドルまでいくと高所得国という位置付けになります。日本ではマレーシアは未だに遅れた国というイメージがありますが、この30年でルックイースト政策を巡る政策的環境が大きく変わっているのが実態です。

そうしたなか、ルックイースト政策も昔のままでよいはずはありません。また、ルックイースト政策が30年間で積み重ねてきたものの重みも増しています。そこで、マレーシアという地域を研究する学術団体であるJAMSとして、ルックイースト政策についてどのように考え、貢献するのかをしっかりと考えていかなければならないのではないかと思います。

＊

それでは基調講演に移ります。今日のメインスピーカーとしてお迎えしたのは、外務省南東アジア部南東アジア第二課長の山本敏生さんです。山本課長は、東京大学在学中、平成元年に外務公務員採用1種試験を合格して、翌平成2年の春に外務省に入省されました。2011年7月に現職の南東アジア第二課長に就任しました。南東アジア第二課というのは島嶼部東南アジアに対する外交を所管する部署であり、山本課長はまさにその現場の指揮官として活躍するキーパーソンです。それでは山本課長、よろしくお願いします。

基調講演

日本－マレーシア関係のあり方と今後の課題

山本 敏生
外務省南東アジア第二課

外務省の南東アジア第二課長の山本と申します。私自身も、1時間近く時間をいただいてお話する機会が滅多にないということと、ご存知の通り国の方針を表す言葉は短くて、それが長くなれば長くなるほど個人の意見が入ってくるということで、今日お話しする内容は個人的な考えということでご理解いただければと思います。

本日は、今年が東方政策30周年という記念すべき年なので、これまでを振り返りつつ、また来年は日本とASEANの40周年という重要な年になりますので、そういったことも念頭に置きながら、今後の日本とマレーシア関係についてのあり方あるいは課題などについての個人的な考え方をお話ししたいと思います。

■ 東方政策30周年を迎えて あらためて感じる日本とマレーシアの絆の強さ

実は私は10年前も南東アジア第二課にいたのですが、そのときは首席事務官という中間管理職的なことをしていたものですから、東方政策の20周年はあまり覚えていないのです。でも、日本とマレーシアとの関係は極めて良好でして、その理由の一つは東方政策があることと、もう一つは貿易と投資関係が非常に良好であることだと思っています。

つい最近もマレーシアに行って大使館で教えられたのは、東方政策30周年の記念事業として、日本とマレーシアで合わせて、なんと年間で100件にも及ぶ事業が行われたということです。日本でも、本日のJAMSによる国際シンポジウムなども合わせれば相当な数の記念事業が行われたということです。これは外務省の常識で言うと非常にすごい数です。事務局の立ち上げなどを全くやらずに100件行われて、それも大使館が承知している範囲だけでその数です。このうち日本でどれだけ行われたのか外務省では調査してもはっきりとはわからないんですが、全体で恐らく150かそ